

# 精神障害者セルフヘルプグループ固有の役割について

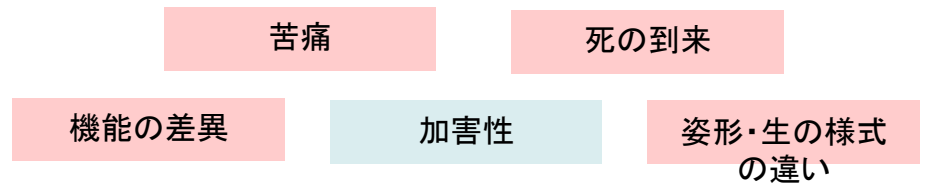
桐原尚之

(立命館大学大学院 / 日本学術振興会特別研究員)

## この報告の問題意識

今の障害学は、精神障害者の問題を取りこぼしているのではないかと(白田 2014)。こうした批判の要因としては、障害の社会モデルの理論形成に携わった研究者が主に身体障害の当事者であったことが挙げられている(立岩 2010a)(天田・立岩, 2011)。立岩真也は、インペアメントに関わってもたらされる事態を5つに分類できるとしている(立岩 2011b)。このうち加害性の問題を精神障害の観点から分析していく。

### インペアメントに関わってもたらされる事態の分類



## 目的と方法

本報告は、否定形精神病患者Aの行為に対する家族、第三者の態度とSHGの仲間の態度を相互作用の観点から分析することで固有の役割を明らかにする。

加害性にかんする問題の帰属／解消の分析を通じて論点を抽出する。  
相互作用役割理論: 他者との相互作用を通じて競争的創造的に役割を取得する。  
これを個人ではなく集団(障害者アイデンティティ)に当てはめて理解する。

## 調査

### 事例

Aは、定期的に再発する否定形精神病患者である。Aは再発により配偶者に暴力をふるい骨折させ、異性との交流のため家庭の資産を散財した。だが、Aは意識障害を伴う躁状態のため行為をした際の記憶がない。Aは、病気が安定しているときは配偶者にも尽くしている。また、Aの行為は、Aの努力で制御できない。しかし、Aの行為は、配偶者、第三者にとって受容し難いとされた。このように精神障害者は理解され難い。

それに対してSHGの仲間は、似たような経験からAの悲愴なる状態を案じて、Aの立場にたって行為を評価、受容した。

Aは、Aの本意ではない帰結であることを理解してくれる仲間の存在によって支えを得ることができた。

### ■加害性にかんする問題の帰属／解消の分析

	個人への	社会への
原因帰属	診断主義派: 個人の気質(主に脳)に原因がある。 生活主義派: 社会の偏見は脳に原因がある、ということをおかしていない点にある。	加害を発生させるのは、社会制度の整備不足の問題であるとする考え方がある。
責任帰属	刑事責任は責任能力の喪失により免責される場合がある。 その他、関係性の問題は加害の行為者の責任とされる。	責任を負う主体は、受刑者だけではなく、社会全体であり、社会全体の修復を求めていく修復的正義がある。
解消可能性	インペアメント。 診断主義派: 加害性は、治療によって克服するか、加害性のあるときにだけ強制医療をする。 生活主義派: スティグマの問題を取り上げ、福祉教育をする。加害性は出現時に診断主義に任せてかかわらない。	ディスアビリティ。 加害性をなくすための強制医療制度があり、廃止によって解決できる。 ただ、制度成立の要因には、精神障害者を恐れる大衆の感情がある。 大衆の感情の解消は、国家が人間の内面を操作することであり、適切だと考えない(修復的正義批判)。

## 考察

これまで加害性への対策は、健常者が被害にあわないために精神障害者の身動きを封じる内容であった。それは、精神障害ゆえの行為が一般に理解され難いという実情を背景としている。それに対してSHGの仲間は、似たような経験からAの悲愴なる状態を案じて、Aの立場にたって行為を受容した。このSHGによる行為の受容は、一般の認識に対してSHGの固有の役割として取得されたものである。

ディスアビリティである強制医療制度は、制度の廃止によって解消可能である。しかし、“加害されることを避けたいと思う大衆の欲求”は、自然な感情であり尊重されてよいはずである。つまり、“加害されることを避けたいと思う大衆の欲求”と“その欲求に支えられた制度”をわけて考えることで、前者は尊重され、後者が解消されればよいのである。解消と位置付けて無理に精神障害者のことを理解させる必要はないし、理解できないことがあっていいのである。むしろ、理解できない領域があるからこそ、セルフヘルプグループが固有の役割をもち、その意義を発揮できる。どうしてもないコンフリクトが生じている場合には、下手に解消しようとはせず、そのままにしておいた方がよいこともある。そういう場合は、互いに一線を踏み越えないというすみわけ方が肝心となる。

このようにSHGには、特定の行為受容において固有の役割が認められた。

## 参考文献

◆白田幸治, 2014, 「障害の社会モデルは解放の思想か? —精神障害のとらえがたさをめぐって」『Core Ethics』10. ◆立岩 真也, 2010a, 「社会モデル」・序 —連載 57」『現代思想』38(10). ◆立岩真也, 2010b, 「社会モデル」・1 —連載 58」『現代思想』38(11). ◆立岩真也・天田城介, 2011, 「生存の技法 / 生存学の技法 —障害と社会、その彼我の現代史・1」『生存学』生活書院, 3.